ふためく考

A study on FUTAMEKU

近藤尚子*

Takako Kondo

要　旨　節用集饅頭屋本には「フタメク」という項目があり、初刊本では「翻」、通行本では「劇」という漢字が掲出されている。初刊本から通行本へ意図的に見出し字の改変が行われたとみることができる。「フタメク」は「ふたふた」という擬声語に由来する語と考えられ、いろいろな資料に見出すことができる。その用例をたどっていくと、本来の音を表す意味から、「あわてふためく」意味に変化していく様子をとらえることができる。表記面では『今昔物語集』のような漢字で書くことを志向する資料においてさえも仮名で書かれている。また、「フタメク」は辞書体資料には見出しにくいが、見出し語として示される漢字には固定的なものがなく、さまざまな漢字表記がみられる。饅頭屋本初刊本の「翻」は、本来の音に由来する表記、通行本の「劇」は変化した後の「あわてふためく」を意味する表記であり、この改変は「フタメク」の語の性格と意味の変化とを反映したものであるとみることができる。

はじめに

節用集饅頭屋本の初刊本フ部言語門に翻（フタメク）という項目がある。同じ饅頭屋本の通行本ではフ部雑用門に劇（フタメク）とある。節用集饅頭屋本はいわゆる古本節用集の中では数少ない刊本の一つである。少なくとも三種の版が知られ、いまそれを初刊本・通行本・通行本異版（零本でオ部以下を欠く）と呼んでおく。初刊本と通行本とは、収録語数も体裁もほぼ同じでありながら、両者の間には七〇〇箇所近い異同が見られる。先ほど挙げた言語門と雑用門との異なりもその一つである。異同はさまざまの形で見られるが、門名の変更、項目の増補や移動、そして「フタメク」のような「見出し語」の改変には積極的かつ明確な改変への欲求や意志が必要であろう。本稿では「フタメク」を手がかりとして、饅頭屋本の改変が含んでいる問題を考察する。

＊今野尚子　本学助教授　日本語学

ふたふたとふためく

フタメクは擬声語フタに接尾辞メクが結びついて動詞となったものであろう。擬声語フタフタは『枕草子』に次のようにみえる。

扇、畳紙など、よべ枕がみにをきしかど、をのづからひかれ散りにけるをもとむるに、くらければ、いかでかは見えん、いづら〳〵とたゝきわたし見いでゝ、扇ふた〳〵とつかひ、懐紙さしいれて「まかりなん」とばかりこそいふらめ。（第六〇段）

暁に帰っていく男の理想像と現実とを対比的に描く、その現実の姿で、「扇ふた〳〵とつかひ」は「扇をばたばたと使って」ということであろう。また、今昔物語集には「フタフタト」「フタメク」を見出すことができる（通常の漢字カナ交じりで示す）。

池ノ邊ニ寄テ草ニ隠レテ伺ヒ居タルニ、鴨ノ雌雄（メドリヲドリ）、人有トモ不知シテ近ク寄来タリ。男此レヲ射ルニ雄（ヲドリ）ヲ射ツ。極テ喜ク思テ、池ニ下テ鳥ヲ取テ、急テ家ニ返ルニ、日暮ヌレバ夜ニ入テ来レリ。妻（メ）ニ此ノ由ヲ告テ喜ビ乍ラ、「朝（ツト）メテニ調美シテ妻ニ令食ム」ト思テ、棹ノ有ルニ打懸テ置テ臥ヌ。

夫、夜半許ニ聞ケバ、此ノ棹ニ懸タル鳥フタ〳〵トフタメク。然レバ「此ノ鳥ノ生キ返タルカ」ト思テ、起テ火ヲ燈シテ行テ見レバ、死タル鴨ノ雄ハ死乍ラ棹ニ懸テ有。傍ニ生タル鴨ノ雌有リ、雄ニ近付テフタメク也ケリ。

（巻一九　鴨雌見雄死所来出家人語第六）

而ル間、息（オキ）ノ方ヨリ鰐、此ノ虎ノ居ル方ヲ差シテ来ル。鰐来テ虎ニ懸ルト見ル程ニ、虎右ノ方ノ前足ヲ以テ鰐ノ頭ニ爪ヲ打立テ、陸（クムガ）様ニ投上レバ、一丈許濱ニ投上（ナゲアゲラレ）テ、鰐仰様ニテ砂（イサゴ）ノ上ニフタメクヲ、虎走リ寄テ、鰐ノ頤ノ下ヲ、踊リ懸テ咋テ、二度三度許打篩テ、鰐［　］ル際（アヒダ）ニ、虎肩ニ打懸テ手ヲ立タル様ナル巌ノ高サ五六丈許有ルヲ、今三ツノ足ヲ以テ、下坂ナド走リ下ル様ニ走リ登テ行ケレバ、船ノ内ニ有ル者共此レヲ見ルニ、半バ皆死ヌル心地ス。（巻二十九　鎮西人、渡新羅値虎語第三十一）

旧大系は巻十九―第六の頭注に「バタバタと翼を動かす音がした。現代語で「アワテフタメク」と熟するのとは異なる」、また巻二十九―第三十一の頭注に「あわてる意ではなく、バタバタする状の描写」とする。枕草子の「扇をばたばた」と同様である。旧大系「今昔物語集」第五巻補注には「フタト・フタ〳〵ト・フタメク」に関する記述があり、「後世、フタメクは「周章（あわて）」と熟して専ら特殊な心的状態を指すのに用いられることが多いが、本集には未だかかる例は見えず、どちらかといえば、周章の因を成す行動、もしくは周章の果であるところの動作を、より直接的に、より具体的に示すことに本質があるように思われる」とする。あわてるとか忙しいという意味は本来のフタメクには含まれていない。

和歌にも「ふたふたと」を見出すことができる。『新撰和歌六帖』に「はこどり」の題で光俊の次のような歌が収められている。

明けわたるみむろの山のはこどりはふたふたとこそとびあがるなれ（二六一五）

この歌は『夫木和歌抄』にもとられている。「はこどり」は、例えば『藻塩草』に「或云是よふこ鳥と云々又云かは鳥只うつくしき鳥歟」とあって、どのような鳥かはよくわからないようであるが、

「（和歌などでは）「箱」の縁で「明（あ）く」を導く」とある（『日本国語大辞典』）。しかしここで和歌には珍しい「ふたふたと」が使われているのは、「箱→蓋」という連想によると思われる。『新撰和歌六帖』に五首収められた「はこどり」の和歌のうち「春されば友まどはせるはこどりのふたがみ山にあさなあさななく」、『夫木和歌抄』の「ふたむらの山の端しらむしののめにあけぬとつぐるはこどりの声」にも「ふた」が詠みこまれている。そういったやや特殊な事情はあるにせよ、鳥の羽音に「ふたふたと」が使われており、それは「ばたばたと」と解される。

『宝物集』にも次のように「ふためく」がみられる。

持戒のびく、里にいでて乞食頭陀するほどに、玉造、人のもとへゆきぬ。玉造、玉をみがきさして、家の内へいるまに、鵝と云鳥いで来て玉をのみつ。玉作かへりきて、玉をみるになかりければ、乞食の沙門のぬすめるなんめりとて、うちせめけるに、大なるかなづちぬけて、鵝の頭にあたりて、鵝ふためきて死ぬ。（巻第五）

五戒のうち不殺生について「一の証拠を申べき也」として載せる話である。一巻本の書陵部本でも「鳥フタメキテシヌ」とあって同様である。これもかなづちが当たった鵝が「ばたばた」した後に死んだというのであろう。

『徒然草』一六二段に「ふためきあへる」が次のようにみられる。

遍照寺の承仕法師、池の鳥を日頃飼ひ付けて、堂の内まで餌を撒きて、戸一つ開けたれば、数も知らず入籠りけるのち、をのれも入りて、立て籠めて、捉へつゝ殺しけるよそおひ、おどろ〳〵しく聞えけるを、草刈る童聞きて、人に告げたりければ、［村の男どもおこりて入て見るに］大雁どもふためきあへる中に法師交りて、打ち伏せ、捻ぢ殺しければ、此法師を捕へて、所より使庁へ出したりけり。殺す所の鳥を首に掛けさせて、禁獄せられにけり。

基俊の大納言、別当の時になん侍りける。（一六二段）

法師が堂の内にまで餌を撒いて無数の鳥をおびきよせ、それを「打ち伏せ、捻ぢ殺」すというむごい場面である。注に「ばたばたと音を立てている中に」とあり、やはり鳥がばたばた翼を動かす意味である。ところが江戸時代の『徒然草諸抄大成』によると「徒然草諺解」に「うろたゆる体なり」と注されていることがわかる。

あはてふためく

『宇治拾遺物語』でも「ふためく」はやはり「ばたばたと」の意味で使用されている。

沖の方より、鰐、虎のかたをさして来るとみる程に、虎、右の前足をもて、鰐の頭につめをうちたてて、陸（くが）ざまに投げあぐれば、一丈ばかり濱に投げあげられぬ。のけざまになりてふためく。おとがひの下を、躍りかゝりて食ひて、二たび三たびばかり打ふりて、なよ〳〵となして、かたに打かけて、手をたてたる様なる岩の五六丈あるを、三の足をもちて、くだり坂を走るがごとく、登りてゆけば、舟のうちなるものども、これがしわざをみるに、なからは死入ぬ。（三九　虎の鰐取たる事　巻三ノ七）

河侯（あとう）がいはく、「いま五日ありて、おはせよ。千両の金をえんとす。それを奉らむ。いかでか、やんごとなき人

に、けふ参るばかりの粟をば奉らん。返々おのが恥なるべし」といへば、荘子の云く、「昨日道をまかりしに、跡によばふ聲有。かへりみれば人なし。たゞ車の輪跡のくぼみたる所にたまりたる少水に、鮒一（ひとつ）ふためく。なにぞの鮒にかあらんと思て、よりてみれば、少ばかりの水に、いみじう大なる鮒有。……」　（一九六　後の千金の事巻一五ノ一一）

三九の話は前節で挙げた『今昔物語集』とほぼ同話である。旧大系の頭注は「自動四。ふたふたとして、あわてること。」とするが、「あわてる」意はないとみるほうがよさそうである。一九六は「ばたばたする。」のみ。

ところで『宇治拾遺物語』には「まどひふためく」の例が見える。

右大臣殿、（中略）梢をめもたゝかず、あからめもせずして、まもりて、一時斗おはするに、此佛、しばしこそ、花もふらせ、光をもはなち給けれ、あまりに〳〵まもられて、しわびて、大なるくそとびの羽おれたる、土におちて、まどひふためくを、童部どもよりて、うちころしてけり。大臣は、さればこそとて、帰給ぬ。　（三二　柿の木に佛現ずる事巻二ノ一四）

『今昔物語集』巻二〇―第三に類話が収められているが、「まどひふためく」の部分は欠字である。旧大系も新体系も頭注では「フタメク」を想定している。『宇治拾遺物語』が単に「ふためく」ではなく「まどひふためく」としているところに、「ふためく」の意味の変化がうかがえる。

『古今著聞集』には「ふためく」単独の例はなく、「あわてふためく」「たふれふためく」がみられる。

傍輩ども思やう、「此物はしぶときおこの物にて、せらるゝ事もぞある。いざゝきだちて、をくするやうなるはかり事めぐらさん」とて、両三人いひ合て、さいばう一、讃岐わらざ一まいをもちて、いそぎさきだちて、彼池の中島なる木のうへにのぼりて待ところに、此男、案のごとく池をわたりて、中島にきてくゐをうたむとす。其時木のうへより。さぬきわらざをなげおとしたりければ、此男すこし立しりぞきて、三帰をとなへてゐたる所に、かさねてさいばうをなげおとしたりければ、池になげ入られて、水音たかゝりけるに、おどろきまどひて、たふれふためきて逃にけり。

（五一六　二條中納言實綱家の侍風雨の夜試膽の事）

是によりて、蒔絵師がもとへかさねて、「いかにかやうなる狼藉のこと葉をば申ぞ。たゞいまの程にたしかにまいれ」と仰られければ、蒔絵師あはてふためきてまいりたりけるに、「此御返事のやう、いかなる事ぞ」とて見せられければ、「すべて申すごしたる事候はず。只今御物を蒔かけて候へば、蒔はて候て、まいり候べしと書て候へ」と申ければ、げにもさにてありけり。仮名はよみなしといふこと、まことにをかしき事也

（五二七　坊門院の蒔絵師某大仮名にて返事の事）

五一六は「試膽」のために東三條の池に出向いたある侍が、傍輩どもの計略にはまって逃げ出す場面である。「おどろきまどひて、たふれふためきて」は宇治拾遺の「まどひふためく」とよく似ている。五二七は「きとまいれ」と呼び出された蒔絵師が「たゝいまこもちをまきかけて候へはまきはて候てまいり候へし」と「あさましき大仮名にて御返事申」上げたところ、「狼藉のこと葉」といわれ、「あはてふためきて」参上する話である。この「あはてふためく」

は、今昔物語集補注のいう「特殊な心的状況を指すのに用いられ」ており、現代と同じであろう。もちろん、「まどひ、ふためく」「あはて、ふためく」と、動詞を並置しているという解釈の余地もある。しかし、まどひ、あはて、たふれ、などと共に用いられる「ふためく」は単に扇や羽を「ばたばた」するという擬声語とは異なるニュアンスを持つに至っている。それは『徒然草諸抄大成』が「ふためきあへる」について掲げていた「うろたゆる体なり」に近いのではないだろうか。

『平家物語』にも「ふためく」はみえるが、多くはやはり「あはて」「たふれ」などと複合した形で用いられている。

郎等宗俊ニ云ケルハ、「兼康ハ…屋嶋ヘ参テ、北国ノ軍ニ木曽ニ生取レテ、此日来朝夕仕ヘツル事ヲモ申バヤトコソ思フトモ、『妹尾コソ最後ニアワテ、子ヲ捨テ落フタメキケレ』と云ワム事モ心憂」　（延慶本第四　兼康与木曽合戦スル事）

カク散々と成ニケレドモ、新中納言ハ少モ周章タル気色モシ給ワズ。女院北政所ナムトノ御船ニ参リ給ヒタリケレバ、女房達音々ニ、「イカニ〳〵」トアワテフタメキ問給ケレバ……

（延慶本第六本　壇浦合戦事　付平家滅事）

「アワテ、…落フタメ」くという表現は、子を捨ててあたふたと逃げ落ちていく様子である。また、後の例はまさに「アワテフタメキ」という形で、前文の「新中納言ハ少モ周章タル気色モシ給ワズ」と対照的に用いられているのである。延慶本から挙げたが、覚一本系の龍谷大学本を底本とする旧大系からも示す。

俊寛僧都一人のこたりけるが、是をきゝ「あまりに思へば夢やらん又天魔破旬の我心をたぶらかさむとていふやらむ。うつゝ共覚えぬ物かな」とてあはてふためきはしるともなく、たをるゝ共なく、いそぎ御使のまへに走りむかひ……（足摺）

都からの使者を迎えた俊寛が「あはてふためき」使いのもとへ走る描写である。これらの例はすべて「ばたばた」という音がやや抽象的に、急ぐあまりに動作がバタバタとしてみえるという状態を表すのに用いられている。

『太平記』でもフタメクは合戦の場面を中心に使用されている。これも多くは「アワテフタメク」という複合の形である。

勅宣ノ御使、其勢二千餘騎、追手搦手ヨリ押寄テ、北山殿ノ四方ヲ七重八重ニゾ取巻ケル。大納言殿、早此間ノ隠謀顕レケリト思給フ。サレバ中々騒タル気色モナシ。事ノ様ヲモ知ヌ北御方・女房達・侍共ハコハ如何ナル事ゾヤト、周章（アワテ）フタメキ逃倒ル。　（巻十三　北山殿謀叛事）

瓜生ハ兼テ案ノ図ニ敵ヲ谷底ヘ帯キ入テ、今ハカウト思ケレバ、其夜ノ夜半許ニ、野伏（ノブシ）三千人ヲ後ノ山ヘアゲ、足軽ノ兵七百餘人左右ヘ差回シテ、鬨聲ヲゾ揚タリケル。寝ヲビレタル寄手共、時聲ニ驚テ周章翊（アワテフタメ）ク処ヘ……　（巻十八　瓜生挙旗事）

其後百矢（モモヤ）二腰取寄テ、張ガヘノ弓ノ寸引シテ、「相模國ノ住人本間孫四郎資氏、下総國ノ住人相馬四郎左衛門尉忠重二人、此陣ヲ堅テ候ゾ。矢少々ウケテ、物具ノ仁ノ程御覧候へ。」ト高ラカニ名乗ケレバ、跡ナル寄手二十萬騎、誰追トシモ無レドモ、我先ニトフタメキテ、又本ノ陣ヘ引返ス

（巻十七　山攻事付日吉神託事）

巻十八の例は『日葡辞書』にも載せられている。巻十七の例は単

独のフタメクであるが、あわて急ぐ程度が甚だしい状態であることを表している。

『日葡辞書』には、Futameki, u, eita. という項目があり、「急ぎあわてている、あるいは、せかせかとあせっている」と注されている。また、Attori の項に、Attorino fini vochita yŏ ni futameku. という諺が載せられている。Attori は「小鳥の一種」であり、諺は「この小鳥が火の中に落ちてあわてふためくように、びっくりして取り乱し、どうしてよいか分別がつかない」とある。いずれの注からも「ばたばた」という羽音は消えてしまっている。もはやフタメクには「特殊な心理状況」を指す働きしか見出せなくなっているのである。

フタメクは抄物にも見出すことができる。やはり「急ぐ」ことに主眼があるようである。

未明ノ時分ニ遅クナルト云テ急キフタメイテ出ルソ挈壺氏ガナイホトニソ余リフタメク程ニ上ニキル衣ヲ下ニキル様ナソ

（『毛詩抄』五）

『詩経』「国風」斉の「東方未明」の抄である。「顛倒衣裳　顛之倒之」は主人の昼夜を問わぬお召しにあわてて出ていく様子を描く。白川静（『詩経国風』東洋文庫一九九〇）はこの詩について「狂言風の趣のある異色あるもので、このような小地主階級が幅をきかせていたのであろう」とする。

ただし『山谷抄』にみられる次のような例は、本来の「ばたばた」の意味が生きているかも知れない。

山――コヽモトノ雞テハ無ソ、山―ト云テ一種類アルソ、此鳥カ水鏡ヲ見テ、我影ヲ無用ニ愛シテアケクニ睡テ死ソ、孤――鸞ハメウトイルコトハ難ソ、去程ニ鏡テ我影ヲ見テハ、フタメクソ、注ニ一奮ハフタメクソ絶ハ死ソ（二・六九オ）

近世の笑話にも「ふためく」はみられる。『きのふはけふの物語』から例を挙げる。

又、さる寺へ参りければ、長老ふためいていづるとて、衣の裾に乾鮭の大なるをひつかけていでて、かくす事はならず。敗亡して、「さて〳〵、これを愚僧が食ぶるかと思し召さん事、かへす〴〵無念に候。是は女共が薬つかひにする」といはれた。（上二二）

そこつなる若衆、餅をまいるとて、物数を心がけ、あまりふためいて、咽につまる。人々笑止がり、薬を参らせても通らず。何かと云うちに、天下一のまじなひてをよびければ、やがてまじなふて、其まゝりうこのごとくになって、三間ばかりさきへとんで出る。みな〳〵、「めでたひ事ぢや。さりとては天下一程ある」といへば、若衆聞給ひ、「名人ではなひ。あったら物を、内へ入るようにしてこそ上手なれ。天下二でもない」といはれた。（上六三）

いずれも単独の「ふためく」である。二二の例は旧大系で「ばたばたとあわてる」、六三は「あわてて」と注されている。擬声語の「ばたばた」ではなく急ぎあわてている状態を表していると考えられる。

フタメクの表記

これまで「ふためく」が本来は「ばたばた」という擬声語に由来する語であったこと、そこから、急ぎあわてるという状態を描写す

ることに主眼が移ったことをみてきた。ここではいくつかの辞書体資料を参照しながら、この語がどのように表記されているかをみたい。「フタメク」は比較的容易に文献に見出すことのできる語であるにもかかわらず、辞書には意外に見つけることが難しい。例えば手近の『倭玉篇五本和訓集成』を検しても「フタメク」は見当たらない。

『温故知新書』は現存最古の五十音配列の国語辞書とされているが、この辞書に「フタメク」が二例みられる。いずれも当然フ部に属するが、所属門は態芸と複用とにわかれる。態芸に「唖（フタメク）」が、複用に「必墮地獄（フタメク）」が収められている。複用には漢字二字以上の見出し語が収められている。しかし態芸にも二字以上の見出し語はあり、この二門の区別は困難なようである。この辞書が何を目的として編纂されたのかを論じる用意は稿者には今はない。『中世古辞書四種』解題によれば、「特有な特異語はかなり多く、普通の辞書類に見当たらないという観点からすれば、それらは二百数十語にも達する。」「稀有の語を多く含む点に、本書の重要さがある」。さて「唖」は例えば『正字通』に「俗字舊註音塚不能言又唖嗿欲吐又音寵氣急貌並非」とある。『正字通』では「非」とされているようであるが、「氣急貌」がこの字の選択の根拠であろうか。この字は古本節用集では阿波国文庫本にみられる。『温故知新書』のもう一つのフタメク、「必墮地獄」はかなりの意訳である。この表記が何に由来するのか、残念ながら現在のところ明らかにできない。しかしこの表記は見る者に迫力を感じさせるのではないだろうか。それに引き当てられたのが「フタメク」なのである。

『運歩色葉集』には「羽音」という漢字列に対して「フタメク」が当てられている。影印で見る限り、静嘉堂本と天正十七年本とは「フタメク」であるが、元亀二年本はフに朱点が施され、同書の解題並びに『時代別国語辞典室町編』では「ブタメク」としている。出典として示されている「新札往来」についてはまだ疑問があるようである。しかしここにみられる「羽音」という漢字列はフタメク本来の意味をよく表しているということができよう。『温故知新書』の「必墮地獄」にしてもこの「羽音」にしても、「フタメク」に単字での漢字を与えることがいかに難しいかを示しているとも捉えることができる。

古本節用集で「フタメク」を収載するものは、管見では饅頭屋本の三本以外には五本しかない。伊勢本略本では前述の通り阿波国文庫本が唖にフタメクを付訓して載せている。これは『温故知新書』態芸門の「フタメク」と同じ漢字表記であった。伊勢本増補本では、辞林枝葉宮城本、広本がフタメクを載せる。漢字表記はいずれも翊で、饅頭屋本初刊本と一致する。この字はさらに印度本の高野山本と経亮本にも載せられている。古本節用集の中では少ないながら多数派である。広本にはもう一つ、咄鷍という漢字列が翊の前の丁に載せられている。鷍あるいは鷍は、小鳥の名として中国の文献にも見出すことができるが、鷍は左傍訓もなく、字書類に見出せない字である。この漢字列が何に由来し、どのような経緯で広本に載せられているのかの解明は今後の課題とせざるをえない。しかし、鳥に関連のありそうな語であることは予想され、『日葡辞書』の Attori をも想起させる。

近世の『合類節用集』では二箇所に鞅掌がフタメクと付訓されている。すなわち巻八言語部中八二丁表フ部に右フタメク左アウシヤ

ウ出典「詩経」として掲載されている。同時に三五丁裏カ部に右カタチツクラズ・フタメク左アウシヤウ出典「詩経」として載せられている。出典として示されている詩は『詩経』小雅谷風の「北山」である。

陟彼北山　言采其杞　偕偕士子　朝夕従事　王事靡盬　憂我父母

傅天之下　莫非王土　率土之濱　莫非王臣　大夫不均　我従事獨賢

四牡彭彭　王事傍傍　嘉我未老　鮮我方将　旅力方剛　経営四方

或燕燕居息　或盡瘁事國　或息堰在牀　或不已于行

或不知叫號　或慘慘劬労　或棲遑堰仰　或王事鞅掌

或湛樂飲酒　或慘慘畏咎　或出人風議　或靡事不為

『毛詩抄』によると、この詩は「大夫カ幽王ヲ刺テ作タ」ものである。「王ノ偏頗カヲリアルニヨリ（中略）我ハカリ辛労シテ父母ヲ養フモエセヌソ六章詩チヤカ六章ナカラ役使不（均）ヲ恨ミタソ」とある。そして「或王事鞅掌」には「煩労皃トシタイソカシイ時ハ容儀ヲカイツクロハヌソイソカシイ体ソ威儀ヲエ引ツクロハヌソ正義ニ職ノ煩シイヲ鞅掌ト云トシタソ荘子ニ有ソ念比ニ註シタソ」とあって、鞅掌は忙しく容儀を整えられないことであるとわかる。それが『合類節用集』の「カタチツクラズ」であり、それをまた「フタメク」としている。つまり、ここでの「フタメク」の意味の中心はきわめて忙しいこと、であるといえよう。

さらに『書言字考節用集』をみておく。巻九上言辞フ部に「鞅掌（フタメク）」とあって、これは『合類節用集』と同じである。出典として毛詩註があり、「失容也〇出土」と注されている。続けて「周章（同）」とあって、周章が「フタメク」に対する漢字列として挙げられていることが注目される。卜部をみると、「騒屑（トリミダス）」に続けて「鞅掌（同）」とあり、それについての注は「字彙失容也出毛詩」となっている。さらにア部には「周章」が収められ、右アハテフタメク左フタメクの訓が付されている。ここでは「文選注驚視ル也又法華経――惶怖」が載せられている。鞅掌・周章・騒屑を一括りにすることができ、ここでの「フタメク」もやはり忙しさのあまりに服装が整わないことである。

節用集饅頭屋本に話を戻す。初刊本の翻は、他の伊勢本増補本のいくつかにもみられた。この字は現在のところ漢和辞書等に見出すことができない。しかし『運歩色葉』に収載されていた「羽音」を横に並べ、一字としたものと考えられないであろうか。太平記に一例だけみられた漢字表記の翃は、『説文解字』に「飛皃从羽立聲與職切」とあり、鳥が飛ぶさまを表す字である。この「立」の下に「日」を加えると翻になるので、その関連も考えられるが、古本節用集の「フタメク」としては多数派の五本に翻が採られているところから、羽音説をとりたい。

饅頭屋本通行本ではこの見出し字を「劇」に改変している。「劇」を「フタメク」の見出し字として挙げるのは古本節用集では現在のところこの一本のみである。『色葉字類抄』仁部辞字門に「ニハカニ（ニハカナリ）」があって漢字が掲げられている中に劇があり（二巻本・三巻本とも）「ニハカ」との結びつきを確認することができる。『落葉集』には劇に「にはか・はげし」とあり、また黒本本節用集には「劇談」に「ゲキダン・カマビスシ・ニワカ・イソカハ

シ」とある。「ニハカ」や「イソガハシ」があてられているところから、劇は忙しいという意味をもつと捉えられていたことがわかる。「フタメク」の見出し字が饅頭屋本において初刊本「翻」から通行本「劇」へ改変されたことは、「フタメク」が本来のバタバタという擬声語に由来する意味から、もっぱら忙しさを表す語へと変化していった状況と重ね合わせることができるのではないだろうか。

おわりに

今昔物語集は、漢字を多く交えた独特の表記体をとるが、そこに見られるフタメクはすべてカナ書きであった。巻二十―第三ではフタメクが想定される箇所が欠字となっていた。これは今昔の筆者（どのレベルかは今は問わない）が「フタメク」に漢字を当てようとして当てきれなかったことを意味していると考える。その他文献資料から挙げた多くの「フタメク」の例はかな・カナで書かれていた。フタメクは擬声語に由来する語であるために、漢字との固定的な結びつきを持ちにくかったのである。辞書体資料では、多くの場合日本語と漢字列との結びつきが問題とされる。固定的な結びつきを持ちにくかったフタメクは、逆に様々な漢字列と引き当てた形で収められることになったのではないだろうか。そこに「フタメク」の意味の変化が加わって状況はますます複雑になったと考えられる。滝沢馬琴の『南総里見八犬伝』には「あはてふためく」が次のように使われている。

そのときあるじ景連は、慌忙（あはてふため）き横ざまに、信時を抱き禁(とど)め、耳に口をさし著て、何事やらん説諭し、軈て左右を見かへりて、頤をもてしらすれば、安西が近臣等、麻呂が従者（ともびと）もろ共に、遽しく立かゝりて、次の房（ま）へ伴ひぬ。（二之巻）

思ひかけなき事なれば、「こは狼藉や。」とばかりに、慌忙（あはてふため）く兵士（つはもの）を追立進む貞行は、孝吉等に力を戮（あは）して、薙倒し、砍拂ひ、無人郷（ひとなきさと）に入るごとく、はや二の城戸へ攻つけたり。（二之巻）

慌忙のうち「慌」が「あはて」であるとすれば、「忙」が「ふためく」である。ここでははっきりと「フタメク＝忙」という結びつきが示されているのである。

『宝物集』には「此馬、子を見て、泪をながしてはためきければ」とあり、「はためく」がみえる。新大系の脚注には「ばたばたと動く」とある。「はためく」と「ふためく」とはよく似ている。しかし、「はためく」のほうが具体的な音により近く、「ふためく」のほうがやや遠く感じられる。「ふためく」が抽象的な意味に動いた背景にはこういった要因も考えられるのではないだろうか。

引用本文一覧（引用順）

引用に際して、漢字の字体・ふりがな・訓点等は変更あるいは省略した場合がある。ルビは（　）に入れて示した。
節用集は公刊されているものはそれによった。

枕草子　新日本古典文学大系
今昔物語集　日本古典文学大系
新撰和歌六帖　新編国歌大観
宝物集　新日本古典文学大系・宮内庁書陵部蔵本宝物集総索引
徒然草　新日本古典文学大系
宇治拾遺物語　日本古典文学大系
古今著聞集　日本古典文学大系

平家物語　延慶本平家物語・日本古典文学大系
太平記　日本古典文学大系
日葡辞書　邦訳日葡辞書
毛詩抄　抄物資料集成
山谷抄　続抄物資料集成
きのふはけふの物語　日本古典文学大系
温故知新書　中世古辞書四種研究並びに総合索引・尊経閣善本影印集成
正字通　上海古籍出版社
運歩色葉集　中世古辞書四種研究並びに総合索引・天正十七年本運歩色葉集・元亀二年　京大本運歩色葉集
説文解字　世界書局印行
色葉字類抄　尊経閣善本影印集成
落葉集　落葉集総索引
南総里見八犬伝　岩波文庫